

大空小学校はまねできない？ 学校の適正規模とマネジメント

その人は「近い将来、学校が減びる」と言った

大空小のエピソードをまとめながら、僕はたびたび、ひとりの熱い教育者のスピーチを思い出していた。東京駅直結のある高層ビルの一室で行われた、教育関係者の集う会議で、彼はこのようにことを言っていた（若干うる覚えだが）。

「学校は今のまま変わらずの存在であれば、2030年には用を足さなくなるだろう。硬直したシステムを維持しただけの学校であれば、近い将来減びると思う」

その人とは、杉並区教育委員会教育長（当時）である、井出隆安さんだ。その場に参加していた僕は、現役教育長が「学校が減びるかもしれない」なんて発言をしたことに、心底驚いた。しかし、その語り口からは人生を杉並区の教育に賭けてきた情熱と経験が感じられ、とても適当にものを言っているように思えなかったのだ。この「学校は減びるかもしれない」という井出さんの言葉は、僕の心のなかに深く刻まれていた。

木村先生はひとつの学校の最前線で挑戦を続けてきた。一方、井出さんは現場から教育行政へ入り、教育長として10年以上、杉並区全体の教育設計を考えてきた人だ。僕たちが考えるテーマである「2030年の学校づくり」について、よりマクロな話を聞くのに適任ではないだろうか。僕はそう考え、再び杉並区役所の教育長室に赴いた。

大空小は理想のモデル校ではない？

実は、大空小学校の元校長・木村先生の話を書く前に、僕は井出教育長のもとを訪ねていた。木村先生との対話へのアドバイスをもらうためだ。そのとき言われたことで、とくに印象に残っていることがある。僕は「木村校長が退任された後も、大空小学校はそのすこさを保てると思いますか？」と井出さんに聞いてみた。すると、井出さんはこう答えた。

「大空小学校が次の代にも「らしさ」を残せるとしたら、それはいい意味での、いい加減さ。だと思っ」

このとき、僕は井出さんの言う、いい加減さ、がどういうものなのか、よく分からなかった。けれども、木村先生との対話を重ねるうちに、その真意が見えてきた。大空小の決まりこは少ない。考え方の根っこさえ共有できていれば、誰が何をしてもかまわない。システムではなく、マインドが脈々と受け継がれている。そこが、井出さんの言う、いい加減さ、とリンクした。

僕は井出さんと再会すると、開口一番に木村先生との対談の報告をした。熱っぽく「2030年の学校のかたちを見ました」などと感想を語った。しかし、僕の熱弁が終わるや否や、井出さん

の口からは衝撃的なコメントが発せられた。

「映画『みんなの学校』は本当に泣けるいい映画だった。そして、木村先生はじめ大空小学校の先生たちは、すばらしい方ばかりだよ。ただね、大空小をそのまま全国すべての学校にとつての。未だの理想的なモデル校」と捉えることは、むずかしいだろうね」

冷や水を浴びせられたように「そ、そうなんですか……？」と同まる僕。木村先生たちのメッセージは「大空のような公立の学校でできることなのだから、全国の学校どこでも実現できない理由がない」というもので、僕はその話に感銘を受けていたし、そのとおりだと思っていたからだ。「大空小学校がうまくいっているのは、小さい学校のよさが生かされているから。木村校長や先生たちの元気な声が、学校中に行きわたる適規模だからなんです。もし大空小が1千人規模の学校だったら、先生たちもあんなに一人ひとりの児童に目を向けるのはむずかしくなる。校長の子どもや先生に対するコミュニケーションも薄まって、スムーズに解決しないことが増えていたと思うよ。児童が多ければ多いほど、一人にかけられる時間はどうして短くなっていくからね」

言われてみるとそのとおりだけど……腑に落ちない顔をした僕に、井出さんはさらに畳みかける。「そうすると、大空小を全国の理想のモデル校にはできないんですよ。あれを理想に設定してしまつと、まず前提として「すべての小学校の規模を大空小程度にする」ことが必要になってくる。そうなると、今の日本では非現実的な話になってしまうでしょ」

教育行政のプロに言われると、若輩の僕にはなかなか反論する隙間を見つけれられない。僕は苦し

まぎれに「大空小学校のすごさは『適規模』なんて言葉で片付けられるものではないと思うんですが……」と言おうとした。

そのときふと、以前「みんなの学校」を一緒に観たある先生が「大空小はすばらしいけど、あんなに忙しくて大変な学校では体が持たないな」と言っていたのを思い出した。彼のような意見の先生の心も動かして、初めて「理想の学校」と言えるのだろうか。井出さんは「汎用性・再現性」をシビアに判断していた。これは、今までの僕にはなかった視座であり、僕がこの人から学ぶべきものだと感じた。

地域社会は『海』、学校はそこに浮かぶ『船』

学力は、貧困を解決し得る

井出さんの杉並区での取り組みの話を聞くと、僕の地元である足立区との差異を感じざるを得ない。井出さんはよく、こんなことを言うのだ。

「杉並には、公教育に関心の高い住人が多いんだ。保護者はもちろん、PTAのOB、商店の主人や町会の世話役、医師や弁護士といった専門家等、さまざまな立場の人たちが経験や知識を生かし、